
Imagination RE:000

レグサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Imagination RE:000

【Nコード】

N0747Z

【作者名】

レグサ

【あらすじ】

仮面ライダーディケイドこと門矢士は、なぜかカメラを無くしてしまった……。そして、やってきた新たな世界 無限を超える、000
果たして、士がこの世界でやるべきことは何なのか!? 土のカメラは見つかるのか・・・? ディケイドが000の世界を駆け巡る!

この作品は、平成ライダー大戦!?? 時空を超える男たちと連動しています。この話の冒頭の詳細は、『平成ライダー大戦!??』

時空を超える男たち』の『第十話』をお読みください。

一枚目 「タカ・トラ・バッタ」(前書き)

これまでのあらすじ

なぜかカメラを無くした土は、新たな世界にやって来た。

カメラのことが気になりつつあてもなく街をマシンドイケイダーで走らせていた土は、巨大なナマコが暴れている現場にたどり着いた。

「まあ、気にしていてもしょうがない……か。さっそく、俺の出番のようだな。」

そして、土は

一枚目 「タカ・トラ・バツタ」

「ナマコは、海に帰さねえとな！」

鈍いながら重い一撃でコンクリートの雨を降らせるナマコを見据えて、一枚のカードを手に掲げる。

「変身！」

『Kamen Ride DECADE』

10枚の灰色の残像が現れたかと思うとそれら全てがが土に重る。そして、腰に装着していたベルトから黒い板状のものが飛出したかと思うと勢いよく頭部に突き刺さり・・・

マゼンダを基調とした異形の姿がそこに現れた。それこそ仮面ライダー、ディケイドである。

「水には電気が効果抜群だろ！」

『Kamen Ride BLADE』

腰のライドブッカーから一枚のカードを取り出すとバツクルに装填したかと思えば、青を基調とした姿になった。仮面ライダーブレイド、青い剣に雷を宿す戦士。それがナマコと対峙する。

「それにしても、大きいナマコだな。これでさっさと片付けるか」
ライドブッカーからカードを一枚取出し、バツクルに装填する。

『ATTACK RIED RIGHTNING BURST』

電子音を合図に低い体勢を取ると一気に飛び上がり、ナマコに向けて急降下する。動きの遅いナマコは、その足に電撃をまとわせたディケイドブレイドによって見事に貫かれた。そして、胴体にぽっかりと穴を空けたナマコはその巨体を苦しそうにくねらせると何か小さなものに崩れていった。ナマコを構成していたそれらは金属質なのかアスファルトに弾かれて甲高い音をたてている。

「あっけないなあ。」

デイケイドの姿に戻り、ナマコだったものの一つを拾い上げまじまじ見る。手に持ったそれは銀色に光るコインのようなものだ。

「・・・なるほど、ヤミーか。ということは・・・ここオースの世界ということか」

「そ、そこのお前！お前は、何者だ！ば、場合によっては・・・」

先ほどまで騒ぎ立てていた警官達の中から若い刑事らしい人物が震える手の拳銃をデイケイドに向けている。震えすぎて彼にだけ地震が起きているか、バイブレーションの機能があるように見える。

「やめておけ、そんなんじゃあ亀も打てないぞ？」

「う、うるさい！何者だ！答えろ！」

「・・・通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ。」

「か、仮面ライダー・・・？」

「変なお面被ってるからか？」

「しっ！聞こえるぞ・・・！」

「そこのお前！」

「はひい！？」

「変な、はないだろ？」

聞き捨てならないことを言った警官に迫りくるデイケイド。相手の警官はすっかり腰を抜かしている。

しかし、その間に入るように何かがデイケイドに向かって飛び降り、それはデイケイドに蹴りを見舞う。飛び降りた衝撃や先ほどまでのヤミーのせいで土埃が立ち、相手の姿が見えないが、それでもデイケイドは冷静に素早く後退して蹴りを避ける。

「今、来た」

土埃が晴れ、警官たちの目の前に現れたのは、頭に赤いタカ、胴体に黄のトラ、足に緑のバツタの意匠が窺える仮面の戦士であった。

「おお！いいところに来てくれたな！」

「仮面ライダーって言う変な奴が現れて・・・」

「誰だ、貴様？」

口々に話す警官たちを無視して彼は問う。それに対してディケイドは

「この世界のオーズか。」

「俺を知っているか・・・。貴様、ディケイドだな」

「なんだ。知ってんのかよ、オーズ？」

「ある男から聞いた。破壊者が・・・！」

「また、アイツか・・・。人気者はつらいなあ」

参ったというジェスチャーをするディケイドだがオーズが腕のトラクローを展開する。やる気満々のようだ。

「だが、無くしたカメラを探す時間が惜しい。一気にケリをつけてやる」

ディケイドは、一枚のカードを取り出してバツクルに装填

『K a m e n R i d e K A B U T O』

紅い角に青い複眼をもつ仮面ライダー カブトに姿が変わる。

「姿が変わったな・・・」

「お前は どうする？メダルでも変えるか？」

「ふっ！メダルを変えるまでもない」

「言ってくれるじゃねえか・・・」

ディケイドカブトとオーズタトコンボの両者が対峙する。雰囲気は一触発発・・・であるがその空気は新たなる乱入者によって壊されてしまった。

「ちょっと待てーい！」

「うお!？」

睨み合っていたために双方とも気が付かなかった乱入者は、空中からオーズに盛大な蹴りを食らわせたのであった。派手に倒れたオーズの傍らに降りたのは

「何やってんだ、お前は!？」

「な、何する!今、デイケイドを倒そうとしているんだぞ!」

「今度はバース、か・・・」

デイケイドがバースと呼ばれた彼は、怒鳴り散らすオーズを助け起こす。が、その掴んだ腕を離さない。

オーズは、さらに苛立ったのか仲間(?)のバースにまでクローを向ける始末・・・。

「邪魔すんな、ゴトウ!」

「邪魔なんかするつもりは無いが・・・他人の迷惑になるのだけはいけないだろ!？」

「迷惑なんてなってないだろ!」

「今は、な。えーっと、デイケイドだったけ?勝負はお預けてここで・・・」

「は?」

「何、勝手なことやってんだ!」

「おとなしくしろって!」

バースが暴れるオーズを羽交い絞めする。確かにバースの言うことは正しい。そこら辺に腰を抜かした警官たちがたくさんいるのだ。

いや、もしかしたら近くの建物の中に一般人のいるかもしれない・・・

。。さきほどの状態のまま戦っていたら間違いなくあたりに被害が出ていたであろう。まあ、クロックアップを使えば一瞬でケリはついたので・・・。

「は・な・せー!」

「警察のみなさーん、すみませんでしたー!」

もがくオーズと共にバースはすでに装着していた背部のフライング

カッターを巧みに操り、上空に飛び去ってしまった。

場に残されたディケイド、警官たちはあっけにとられ、みるみる小さくなっていくバスとオーズをしばらく見送っていた。無論、場は完全に白けていた……。

「なんだアイツらは……。」

あっけにとられている警官たちをスルーして、変身を解き事件現場を後にする土。嵐のような出来事にすっかりカメラのことも忘れ、光写真館への道に引き返すのであった……。

「土君、どこ行ってたんですか!？」

出かける前までやっていた片づけとやらが終わったのかソファアに座って写真を見ていた夏海が駆け寄ってくる。どうやら、心配していたようだ。

「それにタペストリーも勝手に変わっているし……。」

「すでにこの世界の仮面ライダーに合ってきた」

「本当ですか!？」

「ウソついてどうする?」

「この世界の仮面ライダーって、誰なんですか?」

「仮面ライダーオーズ、メダルの力を使って戦う仮面ライダーだ」

土は、上着のポケットから銀色のメダル一枚を取り出し夏海に渡す。夏海がそれを手に取ってまじまじと見るものは、硬貨のように見える。そんなメダルに夏海は、興味深々だ。

「これはなんて言うものですか？」

「それはセルメダル。オーズが使うのはそれより力の強い、コアメダルだ。」

「コアメダル？」

「詳しいことは分からんが、そのコアメダルをこのドライバーにセツトして使うという訳だ」

さらに士は、ユウスケが拾ってきたオーズドライバーを出し、セルメダルをセツトしてみせる。

「へー……って！なんでそのドライバーがここにあるんですか！？ま、まさか士君！」

「ユウスケが拾ってきたやつだろ！」

「そういえば……そうでしたね。じゃあ、この世界の仮面ライダーは変身できないんじゃないんですか？」

「いや、この世界のオーズのドライバーではないみたいだぜ」

「別の世界のことですか？」

「そういうことだな。まあ、ドライバーを無くすとは難儀な奴だ」

この時、別の世界の別の時間軸のオーズがくしゃみしたとは、誰も知らないだろう。

「そういえば……、士君の服装って変わっていませんね」

「変わらない方がいい。また、高校生は簡便な」

「あの時の士君は……」

嫌なものを思い出した士がそれを追い払うかのように手を振るが、夏海もそれについてのことを思い出したのかニヤニヤ笑っている。

「思い出し笑いするな、気持ち悪い……」

「気持ち悪い!?」

「なんでもない」

「また、変なこと言ったら笑いのツボですからね！」

「それだけは簡便な……。そういえば、ユウスケはどうした。さ

つきから出てこないぞ？空気にでもなつたのか？」
「数分前に夕飯の買い出しに行きましたよ。」

「ハックション！・・・誰か、俺のこと話してるのかな？」

買い出しと言つても野菜や肉、お菓子だけで案外荷物としては、少ない。そんなことを呟きつつユウスケは帰る真最中である。

知らない街だが道が広いため、さほど迷うことなく歩くことができているのだ。行きで慣れた道を歩いていると・・・前方に何か落ちているようだ。最初は、布きれか何かかと思つていたユウスケだが近づくにつれそれが人の形をしていることに気が付く。

駆け寄つてみると青年が道の真ん中でうつ伏せで倒れているではないか！青年もこちらの駆け寄ってくる足音で気が付いたのか顔を少し動かした。

「大丈夫ですか！？」

「・・・み・・・て・・・」

「え？見て？」

「・・・道・・・に・・・迷つて・・・」

青ざめた顔を上げて青年はそうユウスケにこう告げた。

「な、にか・・・食べるもの、ありませんか」

「」馳走様でした!」

とりあえず、放置しておく訳もいかないので近くの公園に青年を連れて行きたまたま買っていたお菓子をあげたのだが・・・青年はよほど腹が減っていたのか、あつという間に食べてしまったのであった。

「い、いや・・・どうも」

「道に迷ってたらお腹すいて倒れちゃったんです。朝ごはん食べてこなかったもので」

「この街を知らないの?」

「いや、ここはよく知ってる場所なんですけど・・・俺、方向音痴なんですよ」

自分で言っただけで恥ずかしかつたのか照れ笑いをする青年。

「どこかの建物に入って出てきたら、どこから来たか分からなくなるぐらいです」

「地味にひどいな・・・」

「でも、助けていただけでうれしいです!やっぱ、人は助け合わなくちゃいけませんね」

「はははは・・・」

「俺、氷野エイジっていいいます。お名前は・・・?」

「小野寺ユウスケ。ユウスケって呼んでくれ」

「ユウスケさんは、大学生なんですか?」

「へ?」

「平日に買い物して歩いている人は、主婦かニートか学生ぐらいなんで・・・。ちなみに俺、大学生です。」

「ま、まあ・・・そんなところかな?」

「どこの大学に行ってるんですか!?」

「えーっと・・・、別のところ・・・かな?」

さすがに初対面の一般人にクウガですなんて言えず、あいまに返事をするのだが・・・。

「どつりで今までであったことがなかったんですね。別の学部なら仕方がないことですけど」

「い、いや。そういうことじゃなくって……」

氷野エイジの中で勝手にユウスケは同じ大学の別の学部の学生にさてれしまったのであった。

「で、コイツが恩返しにと、くつついて来たのか？」

「土君、失礼ですよ」

「ご、ごめんなさい。でも、助けてもらったからには何かお礼をしないと、と思つて……」

あの後、エイジがどうしてもお礼がしたいと付いて来て、断ることもできずに写真館にユウスケは戻ってきたのだ。お礼がしたいと付いてきた当の本人はすっかり居座っている。

「いいじゃないか土君。さ、皆で焼き立てのクッキーでもどうぞ」

「わあ！ありがとうございます！」

「いただきまーす」

「何を作っていたかと思つたらクッキーを作っていたんですね」

「ん？土、どうした？」

エイジを凝視している土に気が付いたユウスケが問う。

「てつきり断ると思つていたんだが……」

「受けた好意は断つたら失礼じゃないですか？」

エイジが不思議そうに問い返すが土はそれで黙りこんでしまった。

「そういえば、氷野さんは大学に通っているんですね」

「はい」

「何を学んでいるのですか？」

「法文学部人文学科で歴史を専攻していて・・・」
「歴史？日本の？」

「いや、ヨーロッパの歴史です。特に中世前後の」
「へー」

「すごくロマンがありますね」

「ロマンだなんて・・・やることは当時の文献の解読ぐらいですよ？錬金術師と呼ばれた人々の文献についてやっています。」

「錬金術師って本当にいたの？」

「鋼 錬金術師とか・・・漫画やオカルトな感じがするんですが・・・」

「その伏字、役に立ってないぞ・・・。」

「錬金術師って言うとおカルトに感じる方が多いですが、かつてそう呼ばれた人々の残した研究結果は現代科学の発展にも貢献しているんですよ？錬金術の基本は、化学と一緒にですからね」

「へーへーへー」

「古いぞ・・・」

「どこぞのテレビ番組のネタを披露するユウスケに土がつっこむ。そんな二人に構わず夏海は、エイジの大学の話に夢中になっている。」

「なんか面白そうですね」

「あ、よかつたら研究室に見学に来ませんか？」

「いいんですか!？」

「お安いご用！教授に相談して明日にでも」

「そんな急に・・・？」

「何か用事でも？」

エイジが問うのに対して夏海が言葉を濁す。

「いや、なんか・・・」

「あー、大丈夫です！気になったものは、早く見るのが一番ですから!」

それにお礼もしなくちゃいけませんねとエイジは笑う。すっかり、夏海やユウスケと打ち解けて大学や歴史のことで盛り上がっている。

そんな光景を眺めながら士は、オーズのことについて考えていた。

今後、オーズと出会うとなると戦いは避けられないようだ。もしかしたら、あのゴトウと呼ばれたバースとも戦うかもしれない……。しかし、この世界に来たからには、何かしなくてはならない。戦うことになるかもしれないが今まででもよくあったことだ。何とかなるだろう……。と思う士。

「大学に……。か」

また、何か起こりそうな予感がする士であった。

一枚目 「タカ・トラ・バッタ」(後書き)

士「やっと俺の出番が来たぞ！」

夏海「まだ、『平成ライダー大戦！？』でまともに出てませんから

ね・・・」

ユウスケ「俺、空気だ・・・orz」

士「ドンマイ」

次回 二枚目 『ライオン・ウナギ・コンドル』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0747z/>

Imagination RE:000

2011年12月2日21時45分発行